

私の中の時間どろぼう

浜松市立入野中学校 三年 赤堀 礼奈

不思議だ。

去年までは、蟬の鳴き声が夏の訪れを歓迎しているファンファーレのように聞こえたのに。

カンカンと照りつける太陽が、これから始まる長い夏休みをお祝いしてくれるくす玉のように見えたのに。

夜空を彩る花火の美しさが映画のはじまりのように、胸をはずませたのに。

なぜだ。

今年の私は、夏の足音を聞かずに、苦しいほどの焦りが体いっぱいになり、部活を引退し、一学期も終わってしまった。何だか、一日一日がものすごい速さで流れていっている。その波に飲み込まれないように、教科書や参考書を必死でつかんで、机の前に座る。時計の針だけが静かに時を刻んで、私は夏のけん騒から完全に切り離されている。

『受験生』

今年の私の代名詞。この言葉は、よくわからない焦燥感と出口の見えないイライラで、私を支配する。このところずっと不機嫌な私をみかねた一歳上の姉が本を貸してくれた。

「私も去年受験勉強でたいへんだった時、これを読んだら、何となく気分が晴れたからさ。それに、主人公が私と同じ名前なの。親近感わいちゃって。」

姉は、勉強も部活もいつでも全力投球だ。しかし、そんな彼女も、三年生になって成績が思うように伸びず、夏休みに悪戦苦闘していた。私は勉強の手を休め、本を受け取った。

むかしむかし、灰色の男たちによって時間の節約を促された人々は、死にも狂いで働いた。そこには、仕事への愛情や、心の余裕は皆無で、むしろそんなものは悪だとされていた。いかに効率よく、短時間に多くの仕事をこなすが重要だった。

何だか、現代社会の話のようで、びっくりした。いつの時代も効率を求めるという事なのか。たしかに、短時間で必要な物が手に入ることは魅力的なことだ。

ファストフード店では、注文するとすぐに料理が出てくる。インターネットでクリックすれば、翌日には商品が手もとに届く。開発中のリニアモーターカーが完成すれば、東京と大阪間が約一時間で結ばれる。どれも、私達が望む『時短』をかなえてくれる。しかし、料理がで上がるまでのおいしそうな音やにおいを楽しんだり、お店で商品を吟味し大切に抱えて帰る家路、ゴトゴト揺れる車内から景色を眺め、目的地までの道中をのんびり過ごす、そんな時間は無駄なのだろうか。

『時短』

時間を短縮するという意味だが、一体何の時間を節約するのだろうか。

そういえば最近の私のログセは

「時間が無いから仕方がない。」である。お手伝いを頼まれた時も、こう言って断り、テスト前にうっかり眠ってしまった時も、こう言いわけをした。しかし、時間は誰もが同じように手にできるものだから、自分にだけ時間が無いはずはない。時間は世界中どんな人にも存在する。大人も子どもも、一日二十四時間死ぬまで毎日手に入る。お金で

売買できないから、貧富の差は関係ない。そのような観点からすれば、とても平等ですばらしいものだ。

　　どうやら灰色の男たちに、私も支配されていたみたいだ。物事を成し遂げる過程には目もくれず、一心不乱につき進む。それでも、なかなか目標に到達できない焦りがついて回り、もつとせかせかとスピードをあげる。そして目標に無関係な物には目もくれない。

　　それならば、勉強をする真の目的とは何だろう。決められた時間内に、一問でも多くの問題を解き、よい点数をとることだろうか。偏差値の高い学校に進学するためだろうか。

　　モモの親友ベツポの言葉に、そのヒントがあった。

　　道路掃除の仕事をしているベツポは、こう言った。

「とつても長い道路を受けもつことがよくあるんだ。おつそろしく長くて、これじゃとてもやりきれないと思ってしまう。でもいちどに道路ぜんぶのことを考えてはいかん。つぎの一步のことだけを考えるんだ。いつもただつぎのことだけを。すると、たのしくなってくる。たのしければ、仕事があまくはかどる。これがだいじなんだ。」

「時間がない。」と、焦ってイライラし不安を抱えていた自分に語りかけてくれたようだった。目標まで最短距離で最速でたどりつかなくてはと、不安ばかりの毎日ではつまらない。灰色の男たちはきつと余裕を持つとうとしない私達の心の弱さから生まれてくるのではないだろうか。勉強や毎日の生活、人生が幸せだと思えるように、目の前の一步一步を大切にしていこう。その中に無駄なものなどないはずだ。きつと受験生の夏も悪くない。楽しみながら歩んでいこう。

書名　モモ

著者名　ミヒヤエル・エンデ

発行所　岩波書店